霞ヶ関から眺める証券市場の風景

第63回 ユーロ

金融庁・証券取引等監視委員会事務局次長
復興庁審議官（金融支援担当）　大森泰人

中東欧を旅すれば、至るところでドイツ人の痕跡に出くわす。ドイツが第二次大戦を始めたグダニスクからポーランドに入った際にも強く感じた。ドイツ領時代の名ダンツィヒのほうが知られているこの街は、周辺の世界遺産も、ドイツ騎士団のマルボルク城、同じく騎士団の痕跡が残る中世都市トルンとドイツ色濃厚になる。トルン生まれのポーランド人コペルニクスをドイツ人と詐称したのはナチスだが、詐称動機を生む民族混在の歴史背景はあった。そして、やはりドイツ人の生んだポーランドの最も有名な世界遺産がアウシュビッツになる。私は、悪趣味な冗談を控える感性は持ち合わせている。ただ、日中のアウシュビッツは、個人で自由に動けず団体見学しか許されない。世界中から集まった観光客がぞろぞろ引率されて目にするのは、靴の山、かばんの山、眼鏡の山、義足の山、髪の毛の山、毒ガス缶の山、そしてシャワールームと焼却炉……。解説はいらない。が、順路を決められ、訛りの強い英語を延々と聞かされながらでしか、見ることができない。次第に煩わしくなり、ポーランド人の報復としての観光客強制連行という不埒な感想が脳裏をかすめた。

かつて、日本人がドイツ人と酒を飲めば、「次はイタリア抜きでやろうぜ」と言われたとしばしば聞いた。悪趣味な冗談かと思っていたら、私までミュンヘンのビアホールで経験した。相手は官僚と大学教授になる。常日頃、ドイツ国旗を掲げるのも遠慮し、民族的な思考や発言を抑制してきたから、ひたすら経済成長を追求する類似の戦後史を歩んだ元同盟国民に対しては、アルコールの解放作用が同一方向に働くらしい。心底わがドイツ民族の優秀さを確信しているが、それを正面に打ち出して周辺国に及ぼした惨禍は痛恨の極みゆえ、深層の愛国心理も屈折せざるを得ない。第二次大戦後のドイツ映画が長らく低迷したのも、自らの歴史を直視できなかった事情に起因するように思われる。歴史の呪縛から映画が解放され始めたのは、戦間期のダンツィヒを舞台とする「ブリキの太鼓（1979年）」あたりからではないだろうか。ベルリンの壁が崩壊し、東西に分断されたドイツに再統一の機会が訪れた時、フランスのミッテラン大統領にとっては、再びドイツが中東欧を指向する歴史を繰り返させてはならなかった。ドイツを西欧の一員につなぎとめる必要性がユーロ誕生の原動力になり、コール首相にとっては、最強通貨マルクを放棄し、マルクの恩恵をユーロ圏全体に享受させるのが、再統一の条件になる。

共通の中央銀行（ECB）を持つが、共通の財務省を持たないユーロの構造は、誕生前からとりわけアメリカで疑問視されたが、歴史の重みを踏まえた政治意思が支える実験を、私は根拠もなく好意的に眺めてきた。財政の不均衡を抑制するユーロ圏共通の運営ルールを設けても、ギリシャのように政府が粉飾すればお手上げになる。ただ、アメリカもEUも、財政の不均衡に比べ、民間部門の不均衡が金融により増幅される可能性は、さほど深く心配していなかったように思われる。アメリカは、国内で貯蓄を使いきれない中国や日本に最終需要を提供してきたと自慢する一方、EU内では通常、ギリシャやイタリアは無責任なキリギリスで、ドイツは勤勉なアリと評される。

でも、アメリカと中国、日本の間のグローバル・インバランスがお互い様なら、EU内のインバランスだってお互い様である。ギリシャやイタリアがドイツから輸入して実力以上の暮らしをし、拡大した経常収支の不均衡をドイツの銀行がファイナンスする。輸出品の売手としても、資金の貸手としても、ドイツはユーロの恩恵を十分に享受してきた。もとよりドイツが、再統一のコストを財政の膨張によってではなく、賃金の抑制によって乗り切ったのは、国民性を示す規律正しい手法に違いない。その結果、EU内でのドイツ産業の競争力は一層高まり、競争力が為替レートで調整されない共通通貨が、一層のEU内不均衡を許容する。

堅実なドイツ国内では資産価格バブルが起きないから、ドイツの銀行の資金運用先は国外に向かい、アメリカ製の証券化商品を最後まで買い続けた経緯が示すように、国外では金融規律も緩みやすい。銀行がカモにされなかったのは、マドフのねずみ講くらいだが、これは、今やドイツにはユダヤ人の金融仲間が存在しないからである。ドイツの国民感情が、「これ以上無責任な国々のツケを国民に回すな」と叫んでも、ツケを回すのはドイツの銀行ひいては預金者のために必要なので、実は選択の余地がない。だからこれまで、ユーロ危機をめぐる緊迫した交渉の報道に接しても、ドイツの国家理性は最終判断を誤るまいと達観していた。ただし、ギリシャに出し惜しみすれば、ポルトガルとアイルランドの問題になり、三国への対応が不十分なら、イタリアとスペインの問題になってしまう展開を眺めれば、市場の観測を超える先見的なスキームを打ち出さないと、収束に至らなさそうだとは感じる。これまでドイツはEU内で支援責任を果たしつつ、ほかの国もドイツのように規律正しく運営すべきだと不満を表明してきた。でも、すべての国の経常収支が黒字になり、対外資産を増やしていくことはできない。経常収支赤字が累積債務として蓄積し、財政も悪化してしまった国が緊縮財政を続けると、マクロ経済ひいては財政も、一層悪化してしまう。だから、ドイツの国民感情がどんなに反発しようと、ユーロの恩恵をご破算にしないなら、財政も共有する方向に漸進していくしか途はない。

世界を船で旅する番組の再放送シリーズを見ていて、イタリア船コスタ・コンコルディアによる地中海周遊の旅が飛ばされているのに気付いた。既に沈んでいるからである。マイケル・スケッティーノ船長は、部下に故郷を見せてやろうと進路を離れ、部下の出身島に近づけて座礁し、客を置き去りに脱出した。世界中が非難するのは当然だが、ドイツの週刊誌が、「もし船長がドイツ人だったら、ああいう卑怯なマネはしない」と報じたのは、素直な国民感情の発露とはいえ、公開メディアとしては思慮不足であろう。スケッティーノが同胞であることを心底恥じているイタリア人に対し、イタリア人一般を卑怯者と評するに近い。酔って日本人相手にイタリア抜きと言うだけで我慢していた時代に比べれば、意識せぬまま自制度合いが低下してきたのかもしれない。もちろんイタリアの新聞は、直ちにドイツ誌に反撃する。「われわれにスケッティーノがいるなら、お前らにはアウシュビッツがある」。いきなりトラウマを衝かれて、ドイツ誌が反論できるはずもない。

マイケル・ルイスの新著『Boomerang』（邦題も『ブーメラン』）には、ドイツ人の屈折した深層心理が分析されている。自らは規律正しくしか生きられないが、心底では享楽的な生き方に憧れ、外国人の享楽までファイナンスして応援してしまう。そして貸し倒れても、歴史上、周辺国に規律正しくとてつもない惨禍を及ぼしてきた贖罪の意識が、諦めの心境を後押しする。フランスではミッテラン以来の社会党大統領が誕生して緊縮策の転換を表明し、ギリシャの総選挙でも緊縮反対派が躍進するから、世界に提供する心配の種はつきない。でもやはり私の直観は、ユーロ崩壊などと喧伝される悲惨な展開にはならないだろう、万一ギリシャが脱落しても、その結果生じる事態により、ユーロがいかにお互い様のシステムだったかをすべてのEU構成員が改めて思い知るだろう、だからドイツの国家理性は試行錯誤しつつも最終判断を誤らず、最悪でも危機の連鎖はギリシャだけでとどまるだろうと、さしたる根拠なく告げ続けるのである。

（おおもり　やすひと）